

多面的楽観性測定尺度の作成¹⁾

安 藤 史 高²⁾ 中 西 良 文²⁾ 小 平 英 志²⁾
江 崎 真 理³⁾ 原 田 一 郎³⁾ 川 井 加 奈 子³⁾
小 川 一 美²⁾ 崎 濱 秀 行²⁾

問題および目的

従来、楽観性と抑うつやself-esteemとの関連が検討されてきている (Scheier & Carver, 1985)。その結果、楽観性の高い人は抑うつなどに陥りにくく、精神的な健康を保つことが示されている。このように、楽観性はよりよい生活を送るために重要な性格特性であると考えられる。

今までの楽観性研究の多くでは、楽観性は「将来、肯定的な結果が生じることを期待する傾向」と定義されている。すなわち、将来自分に対しては、肯定的な出来事が起こりやすく、否定的な出来事はあまり起こらないだろうと知覚する傾向のことを指している。Scheier & Carver (1985) は、このような定義に基づき、性格特性としての楽観性を測定する尺度として Life Orientation Test (LOT) を作成した。LOT は、結果に対する一般的な期待を測定する事を目的としており、肯定的項目4項目、否定的項目4項目、filler項目4項目の全12項目より構成されている。その後、Scheier, Carver & Bridges (1994) は、LOTの改訂版である、LOT-Rを作成した。LOT-RはLOTから肯定的項目・否定的項目それぞれ1項目ずつを除いた全10項目からなっている。また、Dember, Martin, Hummer, Howe & Melton (1989) は、楽観性・悲観性をそれぞれ単極の概念と仮定し、その二つを個々に測定する Optimism/Pessimism Instrument (O/P) を作成した。Dember et al. (1989) は、従来の楽観性・悲観性を測定する尺度が比較的限定された領域のみを測定する形

式になっていると指摘し、さまざまな領域を含んだ項目を採用した。O/P は、optimism 18項目、pessimism 18項目、filler 20項目の計56項目で構成されている。このように、期待としての楽観性を測定するさまざまな尺度が提案されており、それらの尺度を用いた研究も多く行われている。

しかし、楽観性を期待以外の側面からとらえる試みもいくつかなされている。例えば、Weinstein (1980) は、楽観的な人の持つ期待の程度ではなく、楽観的な人の認知のゆがみを楽観性としている。Weinstein (1980) は、ある出来事の起こる可能性が、自分と同じような他者に比べてどの程度異なるかを答えさせている。そして、肯定的な出来事が他者に比べて自分にはよく起こり、否定的な出来事は自分にはあまり起こらないと考える程度を楽観性としている。そして、このような楽観性を unrealistic optimism と名付けている。

また、楽観性を説明スタイルという形でとらえる場合もある (沢宮・田上, 1997)。説明スタイルとは、ある出来事の原因についての解釈における個人差のことで、Seligman & Maier (1967) の Learned Helplessness (LH) 理論をもとに提唱されたものである。人は、出来事の原因を(1)外的-内的、(2)安定的-不安定的、(3)全体的-特殊的という3次元で帰属すると考えられており、LH理論では否定的な出来事の原因を内的・安定的・全体的な次元に帰属する説明スタイルを持つ人は、そうでない人に比べてよりLHに陥りやすいとされている。そして、より抑うつ的な説明スタイルを持つ者は悲観的、非抑うつ的な帰属スタイルを持つ者は楽観的と判断される。そして、個人の持つ説明スタイルを測定するために、Attributional Style Questionnaire (ASQ) という尺度が利用されている (Seligman, Abramson, Semmel & Baeyer, 1979)。

このように、楽観性として期待以外の側面を取り上げようという試みはいくつかなされているが、楽観性の多様な側面を合わせて測定しようという試みはまだ十分に

1) 本研究の一部は、東海心理学会第49回大会において発表された。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

3) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (前期課程)

されていない。より広く楽観性を捉えるためには、期待だけにとらわれない、様々な側面からの検討が必要である。そこで本研究では、従来多く採用されているような楽観的な「期待」という側面に加え、楽観的な人格を構成すると考えられるその他の側面も含めた楽観性を測定するための尺度を作成することを目的とする。

では、期待以外の楽観性とはどのようなものが考えられるのだろうか。説明スタイルによる楽観性は、将来の出来事に関するものではなく、現在自らが置かれている状態に対するものである。すなわち、現状に対する評価がどの程度楽観的であるか、ということである。このことから、楽観的な評価という側面があることが推測される。また、この評価と期待をつなぐ楽観性というものも考えられる。現状に対して否定的な評価を下した場合、楽観的でない人はネガティブな情動を経験することが予測される。それに対して、楽観的な人はそのネガティブな判断に固執せず、肯定的な将来に目を向けることによって否定的な情動を感じないのではないだろうか。このように、「失敗してもそれにこだわらない」「何らかの事象が起こったとしても、それについて深く考えない」といった割り切りを効果的に行える人に関しても、楽観的であるとの印象を受ける。

これらを総合し、本研究では楽観性の下位概念として①ネガティブなことは起こらないだろうという「楽観的期待」②たとえネガティブだとされる事象が起こっても、ポジティブに考える「楽観的评价」③ある事柄や考えにこだわらないという「割り切りやすさ」という3つの側面を仮定する。そして、多側面からの検討を可能にする多面的楽観性測定尺度（Multidimensional Optimism Assessment Inventory, 以下MOAIと略す）の作成を第一の目的とする。

その際に、具体的事象に関する表現を含んだ項目を用いて尺度構成を行う。広く用いられている楽観性尺度であるLOTにおいては、項目内容に具体的な事象を含むのではなく、より一般的で抽象的な表現を用いている。これは、実際の能力と、自己の能力に関する楽観的な認知が混同されるのを防ぐという目的のためである。しかし、個人の経験する事象の特徴により、異なる楽観性が現れることも考えられる。例えば、ある事象を対処可能であると認知した場合には、自己の能力を楽観的に認知する傾向としての楽観性が影響すると考えられる。それに対して、対処不可能であると認知した場合には、特に根拠は無いにも関わらず、肯定的な結果を期待するという楽観性が見られるのではないだろうか。そこで、本研究では、具体的事象に関する表現を用いた項目を取り入れた尺度を作成する。

そして、MOAIの妥当性検討のため、楽観性概念に関連のある他の構成概念もあわせて測定する。まず、楽観性と正の関連を持つ構成概念として、社会・政治的態度の評価（楽観－悲観）・充実感・自尊心・特性的自己効力感を取り上げる。社会・政治的態度とは、個人の社会や社会状況に対する基本的な態度として、（心理的）疎外態度や参加志向、適応志向などをあらわしたものである。辻・東（1986）は、態度の因子として「評価（楽観－悲観）」「外的統制－内的統制」「適応」の三次元を提唱しているが、本研究ではこの三次元の一つである「評価（楽観－悲観）」次元を取り上げる。「評価（楽観－悲観）」は「現在の状況から考えて、これからの若者にとって未来は明るい」というように社会的状況に対して楽観的か悲観的かの評価を測定する次元であると定義されている。そのため、「評価（楽観－悲観）」は特性的な楽観性尺度であるMOAIとは、正の相関関係を持つことが予測される。そして、充実感とは、青年が健康な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情である。大野（1984）は、西平（1979）の現代青年の心情モデルをもとに青年の充実感を信頼、自立、連帯の3側面から測定している。その第1因子は「充実感気分－退屈・空虚感因子」であり、将来に関する希望や時間的展望を持つこと、またそれが実際の努力目標になるほど具体化されていることは、青年期の充実感に密接に関連している（大野，1990）。このことから、充実感もMOAIと正の相関を持つことが予想される。また、従来の楽観性研究（Scheier & Carver, 1985など）と同様に、自尊心とも正の関連を持つことが予想される。特性的自己効力感に関しては、従来の楽観性研究において検討されてこなかったが、高い自己効力感とは将来の成功に対する期待を導くため、期待に関する楽観性とは正の関連を持つであろう。しかし、MOAIでは期待以外の楽観性に関しても測定をしているため、自己効力感と関連しない側面が見いだされることが予想される。

これらに対して、楽観性と負の関連を持つ構成概念として、抑うつ性・ミスを過度に気にする傾向（Concern Over Mistakes, 以下CMと略す）を取り上げる。従来の楽観性研究（Scheier & Carver, 1985など）では、抑うつは楽観性と負の関連を持つことが示されている。そのため、MOAIとも負の関連を持つことが予測される。また、CMとは、桜井・大谷（1997）が作成した「新完全主義尺度」の下位概念の1つである。完全主義とは、過度に完全性を求めることと定義される（大谷・桜井，1995）。「CM」とは、自己が常に完全であることを希求し、現実自己が少しでも逸脱すると、自己を許すことが出来ないと感じ、低い自己評価しかもつことがで

きない傾向を表す概念である。ミスを通じて過度に気にする傾向は抑うつ傾向および絶望感とは有意な正の相関が示されており、MOAIとは負の関連を持つと予測される。

これらの構成概念とMOAIとの関連について検討し、MOAIの妥当性を確認することを第二の目的とする。

方 法

被調査者

愛知県内の大学生および短大生460名（男性296名、女性163名、不明1名）に対して調査を実施した。平均年齢は19.4歳であった。

調査時期

1999年7月に調査を実施した。

質問紙の構成

①多面的楽観性測定尺度（MOAI）

多様な楽観性を測定する尺度として、多面的楽観性測定尺度を作成した。楽観性の側面として、①ネガティブなことは起こらないだろうという「楽観的期待」②たとえネガティブだとされる事象が起ころうとも、ポジティブに考える「楽観的評価」③ある事柄や考えにこだわらないという「割り切りやすさ」の3つの側面を仮定した。各側面についてそれぞれ、①「楽観的期待」24項目、②「楽観的評価」16項目、③「割り切りやすさ」6項目の全46項目が作成された。各項目に対して、「1. 全くそう思わない」から「5. 非常にそう思う」までの5段階で評定させた。

②LOT-R (revised Life Orientation Test)

従来広く用いられてきた楽観性尺度として、Scheier et al. (1994) の作成したLOT-Rを日本語訳し、実施した。元の尺度は楽観性項目6項目とfiller項目4項目の10項目から構成されていたが、今回はfiller項目は使用せず、楽観性項目6項目のみを用いた。各項目に対して、「1. 全くそう思わない」から「5. 非常にそう思う」までの5段階で評定させた。

③社会・政治的態度の評価（楽観－悲観）尺度

「社会・政治的態度の評価（楽観－悲観）」次元を測定するために、辻・東（1986, 1989）の「社会・政治的態度」の下位尺度である「評価（楽観－悲観）」尺度を用いた。12項目からなり、社会や政治に対する考えについて、「1. まったくそう思わない」から「5. まったくそう思う」までの5段階で評定させた。

④CM尺度

Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate (1990) の「完全主義尺度」を参考にして、桜井・大谷（1997）が作成した「新完全主義尺度」の下位尺度である「CM」尺度を用いた。全5項目からなる尺度で、各項目に関し

て普段どのように考えて生活しているかを、「1. 全くあてはまらない」から「6. 非常にあてはまる」まで6段階で評定させた。

⑤充実感尺度

充実感尺度として、大野（1984）の作成した充実感尺度を使用した。全5項目からなる尺度で、各項目が現在の自分にどれほどあてはまると思うかについて、「1. 今の自分に全くあてはまらない」から「5. 今の自分に非常にあてはまる」までの5段階で評定させた。

⑥特性的自己効力感尺度

状況に依存しない特性的な自己効力感を測定するために、成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田（1995）の特性的自己効力感尺度を用いた。23項目からなり、各項目に対して「1. まったくそう思わない」から「5. まったくそう思う」までの5段階で評定させた。

⑦自尊心尺度

自尊心尺度として、Rosenberg（1965）の自尊心尺度の星野（1970）による日本語訳を採用した。10項目からなり、各項目に関して普段どのように考えているかを、「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」までの4段階で評定させた。

⑧ベック抑うつ性尺度（Beck Depression Inventory）

抑うつを測定する尺度として、Beck, Ward, Mendelson, Mock, & Erbaugh（1961）による「BDI」を日本語に訳した「BDI-I」（林, 1988）を使用した。全16問で、4つの文章の中から自分の気持ちを最もよく表している文章を1つ選ぶという形式の尺度であった。

結 果

1. MOAIの尺度構成

(1) MOAIの因子構造の検討

MOAIの因子構造を検討するため、全46項目に対して主因子解・promax回転による因子分析を行った。その結果、固有値の減衰状況や因子の解釈可能性などから6因子解を採用した（Table 1）。

第1因子は、「32. どんな問題にでもそれなりに対処できると思う」「20. 困難な課題を課されても、何とかなると思う」などの項目の因子負荷量が高くなっていた。項目内容から、この因子は問題や課題に直面したときに自己の対処能力を過大にもしくは楽観的に評価する傾向を表していると考えられた。そこで、「楽観的な能力認知」因子と命名した。

第2因子は、「1. 何事もあれこれ思い悩まない」「8. 困ったことが起きても、悩んでも仕方がないと思うのであまり気にしない」などの項目が高い負荷量を示してい

多面的樂觀性測定尺度の作成

Table 1 - 1 MOAIの因子分析結果

項	目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
32.	どんな問題にでもそれなりに対処できると思う	.785	.028	-.021	-.110	-.048	.069
20.	困難な課題を課されても、なんとかなると思う	.780	.084	-.001	-.108	-.042	.016
2.	何か困難な出来事が起きても、切り抜けることができると思う	.759	.082	-.115	-.036	-.217	.161
11.	財布がなくなったとしても、なんとかなると思う	.691	-.062	.071	-.002	-.188	-.226
10.	失敗しても、そこから学ぶことがあると思っている	.072	-.060	.098	-.171	-.310	-.038
4.	たとえそれほど自信がないことでも、結果的になんとかなると思う	.544	.196	-.063	-.134	.059	.047
46.	何か失敗をしても、最後にはうまくやることができると思う	.478	-.004	.014	.039	.197	.128
41.	目的地までの道順が分からない時でも、行くことができると思う	.447	-.060	-.119	-.118	.100	.040
42.	やらなくてはいけないことが多くある時でも、それをやり終えることができると思う	.398	-.046	-.138	-.063	.122	.237
37.	外出した時に、忘れ物をしてきたことに気づいても、なんとかなる気がする	.351	.007	-.192	-.019	.145	-.002
1.	何事もあれこれ思い悩まない	-.212	.771	-.008	.002	-.052	.049
8.	困ったことが起きても、悩んでも仕方がないと思うのであまり気にしない	.017	.753	-.018	-.049	.141	-.082
24.	何か物事に失敗しても、しかたなかったと思いあまり悩まない	.268	.696	-.022	-.200	.103	-.174
31.	失敗しても、それにこだわらない	.112	.651	.054	.079	.031	-.141
26.	自分ではどうしようもないと思うことは、あまり深く考えない	.015	.624	.023	-.148	.064	-.044
44.	昔の失敗や、いやだったことについてくよくよと悩んでしまう	-.063	-.422	-.028	-.232	.182	-.079
19.	先のことについていろいろ考えたり、悩んだりすることが多い	.167	-.597	.016	-.235	.159	-.102
15.	困ったことがあったら、きっと誰かが助けてくれると思う	-.071	-.070	.985	-.109	-.088	-.092
14.	周りの人は、自分に親切にしてくれるだろうと考えている	-.074	.047	.832	-.050	-.174	.092
35.	失敗しそうになると、必ず何かが助けてくれると思う	-.097	.055	.634	-.114	.312	-.117
6.	人に頼み事をした時には、必ずきいてもらえらると思う	-.103	.064	.550	-.130	.176	-.016
12.	この先、人とのめぐり合わせは良いと思う	.209	-.109	.410	.141	-.222	.187
36.	自分は運が強いと思う	.075	-.146	.139	.493	.128	-.066
25.	成功するか失敗するか5分5分の事態では、たいてい成功すると思う	.045	.074	-.015	.390	.287	-.074
39.	朝、悪いことがあると、ついてない1日になりそうだと思う	-.003	-.049	.101	-.397	.107	-.034
38.	何か失敗をしてしまうのではないかと、という気持ちになる	.144	-.274	.000	-.541	.150	-.073
34.	自分はじゃんけんをするといつも負けるような気がする	.150	.058	.070	-.583	.050	.072
40.	半分の人があたるくじを引く時、自分ははずれを引くと思う	.191	.021	.107	-.861	.045	-.006
21.	交通事故にあったとしても、私はかすり傷程度ですむと思う	-.038	-.013	-.073	-.108	.638	.074
17.	自分は犯罪に巻き込まれないと思っている	-.328	.082	.043	-.302	.559	.249
30.	将来、自分の住んでいるところに大きな地震は起きないと思う	-.179	.051	-.012	-.162	.550	.207
23.	自分が買った宝くじはあたると思う	-.009	-.056	-.029	.250	.499	-.250
18.	将来、私は幸せに暮らせると思う	-.001	-.072	-.003	-.093	.111	.877
7.	私は幸せな家庭が築けると思う	.018	-.115	-.014	-.041	.106	.716
27.	この先、楽しいことがずっと待っていると思う	.162	-.080	.099	.055	.089	.470
9.	これから先のことを考えると、暗くなることが多い	.087	-.318	.068	-.252	.199	-.456
29.	うまくいくかどうか分からない時でも、最終的にはうまくいくような気がする	.161	.028	.090	.104	.278	.270
28.	私は何をやってもうまくいく方だと思う	.085	.010	.099	.328	.211	.169
13.	新しくはじめた物事は、うまく進むような気がする	.197	-.086	.261	.134	.082	.145

Table 1 - 2 MOAIの因子分析結果(続き)

項	目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
3.	私は友だちになろうと思えば、誰とでもすぐに友だちになれると思う	.058	.022	.173	.124	-.062	.139
22.	常に物事の良い面を見ようとする	.109	.279	.299	-.145	.074	.122
16.	私の望みは必ずかなうと思う	.096	-.041	.219	.147	.262	.114
5.	いつでも私には良い結果が待っているような気がする	.205	.164	.148	.141	.206	.049
43.	ここぞ、という時には、必ず成功すると思う	.327	-.081	-.013	.330	.177	.010
45.	手に入れたと思ったものは、いつか必ず手に入ると思う	.182	-.096	.014	.090	.308	-.061
33.	困難は簡単に乗り越えられると思う	.120	.276	.034	.156	.236	-.149
因子間相関		F 2	.499				
		F 3	.567	.237			
		F 4	.722	.419	.513		
		F 5	.609	.320	.637	.515	
		F 6	.615	.326	.563	.600	.465

た。これらの項目は、自分が失敗してもあまり気にしない傾向や、物事にあまり執着しない傾向を表すと考えられる。そこで、「割り切りやすさ」因子と命名した。

第3因子は、「15. 困ったことがあったら、きっと誰かが助けてくれると思う」「14. 周りの人は、自分に親切にしてくれるだろうと考えている」などの項目が高い負荷を示していた。これらの項目は、自分以外の外在要因からの援助などを期待する傾向を表していると考えられることから、「外在要因への期待」因子と命名した。

第4因子は、「36. 自分は運が強いと思う」が高い正の負荷を示し、「38. 何か失敗をしてしまうのではないか、という気持ちになる」「34. 自分はじゃんけんをするといつも負けるような気がする」などが高い負の負荷を示していた。このことから、この因子は、自身の幸運を信じる傾向を表していると考えられたため、「運の強さへの信念」因子と命名した。

第5因子は、「21. 交通事故にあったとしても、私はかすり傷程度ですむと思う」「17. 自分は犯罪に巻き込

まれないと思っている」などの項目が高い負荷を示していた。この因子は、ある出来事の生じる程度を不正確に判断する傾向を表しており、楽天的な考え方であると言える。そこで、「楽天的楽観」因子と命名した。

第6因子は、「18. 将来、私は幸せに暮らせると思う」「7. 私は幸せな家庭が築けると思う」など、将来に対して楽観的な期待を持つ傾向を表す項目の負荷量が高かった。そこで、「楽観的展望」因子と命名した。

(2) MOAIの下位尺度の構成

因子分析の結果を基にMOAIの下位尺度を構成した。単一の因子にのみ.35以上の因子負荷量をもつ項目を各下位尺度項目として採用した。その結果、「楽観的な能力認知」尺度が10項目、「割り切りやすさ」尺度が7項目、「外在要因への期待」尺度が5項目、「運の強さへの信念」尺度が6項目、「楽天的楽観」尺度が4項目、「楽観的展望」尺度が4項目から構成された。そして、各下位尺度項目得点の合計を各下位尺度得点とした。各下位尺度得点は、得点が高いほどより楽観的な傾向にあることを示してい

Table 2 MOAI下位尺度間相関

下位尺度	平均	S D	α 係数	割り切りやすさ	外在要因への期待	運の強さへの信念	楽天的楽観	楽観的展望
楽観的な能力認知	33.7	6.0	0.80	.435	.362	.444	.249	.520
割り切りやすさ	18.8	5.5	0.83		.166	.347	.155	.314
外在要因への期待	14.4	3.4	0.77			.271	.357	.447
運の強さへの信念	17.5	3.9	0.65				.217	.419
楽天的楽観	10.5	3.0	0.56					.269
楽観的展望	13.7	3.1	0.77					

注：全て1%水準で有意

る。各下位尺度得点の平均値・標準偏差と α 係数をTable 2に示す。「楽天的楽観」については α 係数が.56とやや低い、その他の尺度についてはある程度の信頼性が確認されたと言える。

さらに、MOAIの下位尺度間の関係を検討するため、下位尺度間相関を算出した (Table 2)。その結果、全ての下位尺度間において1%水準で有意な正の相関が見られた。「楽観的な能力認知」と「楽観的展望」の間の相関がやや高いが、全体的に中程度の相関にとどまっていた。

(3) MOAIの下位尺度得点の分布

楽観性の傾向を検討するため、各下位尺度の得点可能範囲の midpoint を基準に、それより得点が高いものを楽観性高群、それより得点が高いものを楽観性低群とした。なお、尺度得点が midpoint である被調査者は、人数のバランスを考え、得点の平均値が含まれない方の群に分類した。下位尺度ごとの楽観性高・低群の人数をTable 3に示す。「楽観的な能力認知」では被調査者の72.9%が楽観性高群に含まれており、自己の能力に対して楽観的に認知している被調査者が多いことが示されている。また、「楽観的展望」においても楽観性高群が69.1%と楽観的な展望をもつ被調査者が多い。それに対して、「割り切りやすさ」では64.9%、「楽天的楽観」では64.6%の被調査者が楽観性低群に含まれている。また、「外在要因への期待」「運の強さへの信念」では、両群がほぼ半数ずつとなっている。

さらに、各被調査者が各下位尺度においてそれぞれどちらの群に含まれるかを基に、楽観性プロフィールを作成した。2⁶=64種類のプロフィールが作成されることになるが、6種類のプロフィールにはいずれの被調査者も当てはまることがなかった。当てはまる被調査者の多いプロフィール10種類といずれの被調査者も当てはまるものがなかったプロフィールをTable 4に示す。

その結果、最も多く見られたのはすべて非楽観的であるというプロフィールであった。そして、2番目に多く見られたのは、すべて楽観的に捉えているというプロフィールであった。また、以下の8種類のプロフィールは「楽観的な能力認知」と「楽観的展望」が楽観的なプロフィールであった。それに対して、当てはまる被調査者のいなかったプロフィールは「楽観的な能力認知」「楽観的展望」の両方もしくは一方が楽観的でなく、「割り切りやすさ」が楽観的なプロフィールであった。これらは、「楽観的な能力認知」「楽観的展望」で楽観性高群に分類される被調査者が多く、「割り切りやすさ」において楽観性低群に分類される被調査者が多くなっているためであると考えられる。

Table 3 各群の人数

下位尺度	楽観性高群	楽観性低群
楽観的な能力	331 (72.9%)	123 (27.1%)
割り切りやすさ	160 (35.1%)	296 (64.9%)
外在要因への期待	217 (47.9%)	236 (52.1%)
運の強さの信念	223 (48.6%)	236 (51.4%)
楽天的楽観	163 (35.4%)	297 (64.6%)
楽観的展望	316 (69.1%)	141 (30.9%)

2. MOAIと外在基準との関係

MOAIの妥当性を検討するため、外在基準との相関係数を算出した。外在基準として用いられた尺度は全て1因子構造であることが先行研究において確認されている。本研究においても、改めて主因子法による因子分析を実施し因子構造を確認したが、固有値の減衰状況より、いずれの尺度も1因子構造であると判断された。そこで、

Table 4 多く見られたプロフィールおよび当てはまる被験者が存在しなかったプロフィール

	順位										当てはまる被験者無し					
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩						
楽観的な能力	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	○
割り切りやすさ	●	○	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○
外在要因への期待	●	○	●	○	○	○	●	○	○	●	●	●	○	○	○	○
運の強さの信念	●	○	●	●	○	○	○	●	○	○	●	○	●	●	○	○
楽天的楽観	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○	○	●	○	●	○
楽観的展望	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●
人数	33	25	21	21	20	18	18	14	14	13						
%	8.1	6.1	5.2	5.2	4.9	4.4	4.4	3.4	3.4	3.2						

○は楽観性高群、●は楽観性低群であることを示す

Table 5 MOAI各尺度と外在基準との相関

下位尺度	LOT-R	社会・政治的 態度の評価	CM	充実感	特性的自己 効力感	自尊心	BDI-I
楽観的な能力	.507**	.206**	-.342**	.262**	.500**	.486**	-.471**
割り切りやすさ	.346**	.153**	-.338**	.163**	.282**	.367**	-.358**
外在要因への期待	.403**	.372**	-.155**	.221**	.242**	.264**	-.252**
運の強さの信念	.486**	.202**	-.325**	.302**	.471**	.561**	-.438**
楽天的楽観	.330**	.196**	-.014	-.003	.060	.161**	-.113*
楽観的展望	.608**	.300**	-.343**	.412**	.447**	.563**	-.503**

** $p < .01$ * $p < .05$

各尺度の項目の合計得点を各尺度得点とした。MOAIの下位尺度と外在基準との相関係数をTable 5に示す。

「楽観的な能力認知」「割り切りやすさ」「外在要因への期待」「運の強さへの信念」「楽観的展望」は、LOT-R・社会・政治的態度の評価・充実感・特性的自己効力感・自尊心と正の相関が、CM・BDI-Iとは負の相関が示された。

しかし、「楽天的楽観」は、LOT-R・社会・政治的態度・自尊心の評価と正の相関、BDI-Iとは負の相関が示されたが、その他の尺度とは有意な相関係数が見られなかった。

考 察

本研究の目的は、楽観性を多面的に測定する尺度であるMOAIを作成し、その妥当性を検討することであった。そこで、多面的に楽観性を測定できるような質問項目を作成し、調査を実施した。項目作成時には、①「楽観的期待」②「楽観的評価」③「割り切りやすさ」の3つの側面が想定されていたが、因子分析の結果から、6つの下位尺度が構成された。

①「楽観的期待」と想定されていた項目は、主に「外在要因への期待」「運の強さへの信念」「楽天的楽観」の3つの下位尺度へと構成された。この3つの下位尺度は、いずれも従来の楽観性の定義である「将来に対する肯定的な期待を持つ傾向」を表すものと考えられる。しかし、これらの下位尺度はその期待の根拠が異なっている。そのため異なる下位尺度として構成されたものと考えられる。それに対して、②「楽観的評価」項目は主に「楽観的な能力認知」尺度を構成した。これらの項目は、問題や課題に直面した場面を想定しており、それに対して対処できるか否かの評価という点を強調したものが多い。そのため、このような尺度構成がなされたと考えられる。そして、③「割り切りやすさ」項目は主に「割り切りやすさ」尺度を構成した。また、下位尺度のうち、「楽観

的展望」尺度は①「楽観的期待」項目と②「楽観的評価」項目とが半分ずつ含まれていた。

その後、各下位尺度の得点を基に、各被調査者の楽観性傾向のプロフィールを作成し、楽観性傾向の検討を行った。その結果、もっとも多くみられたプロフィールは、すべての下位尺度において楽観的でないというプロフィールとすべての下位尺度において楽観的であるというプロフィールであった。このことから、MOAIの6つの下位尺度は楽観性という概念の下位概念を表すものとしてのまとまりをもっていると考えられる。しかし、その他のプロフィールを検討すると、下位尺度ごとの人数分布の偏りから、多くみられるプロフィールと該当する被調査者のいないプロフィールとがみられた。

下位尺度の得点傾向について検討してみると、「楽観的な能力認知」「楽観的展望」尺度に対してはより楽観的な回答をする被調査者が多いのに対し、「外在要因への期待」「運の強さへの信念」では、楽観的に回答する被調査者と楽観的な回答をしない被調査者がほぼ半数ずつとなっている。また、「割り切りやすさ」「楽天的楽観」では楽観的な回答をしない被調査者の方が多かった。このような被調査者の偏りを反映して、さまざまな楽観性傾向を表すプロフィールが現れたと言える。個人間での楽観性傾向の違いが、個人の行動傾向の違いに反映されると予測されるため、本研究において試みられたように、楽観性を多面的に捉えることは、個人の行動をより詳細に説明するために有益であると考えられる。

さらに、MOAIの各下位尺度間の関係および他の構成概念との関係を検討した。LOT-RはMOAIの下位尺度すべてと中程度以上の正の相関を示した。このことから、MOAIは既存の尺度で測定される楽観性と類似した概念を測定していると考えられる。さらに、楽観性と正の相関をもつと予測される社会・政治的態度の評価(楽観-悲観)・充実感・自尊心・特性的自己効力感との関連について検討した。MOAIの下位尺度は、各構

成概念とおおむね正の相関を示しており、予測と一致する結果が得られた。しかし、「楽天的楽観」については、充実感・自尊心との間の相関が有意ではなく、社会・政治的態度の評価（楽観－悲観）・特性的自己効力感との相関も低い値であった。また、楽観性と負の関連を持つ構成概念として、抑うつ性・CMとの関連を検討した結果、全体的としては予測に一致する負の相関が示されたが、「楽天的楽観」に関しては、CMと有意な相関が見られず、抑うつ性とも弱い相関しか示されなかった。このように、「楽天的楽観」に関しては他の構成概念と予測されたような関連は見られなかった。「楽天的楽観」は、MOAIの他の下位尺度やLOT-Rとの間には有意な正の相関を示しており、楽観性概念の一部を成すものと考えられる。しかし、 α 係数も低く、尺度得点の分散も小さいため、項目内容を再検討し、尺度としての質を高める必要があるだろう。

MOAIのその他の下位尺度の特徴に関して述べると、「楽観的な能力認知」「運の強さへの信念」「楽観的展望」は類似した傾向を示している。これら3つの下位尺度は相互相関も高く、比較的近い側面を表していると考えられる。それに対して、「外在要因への期待」は、社会・政治的態度の評価（楽観－悲観）とMOAIの下位尺度の中では最も高い相関を示していた。しかし、その他の外在基準とは他の下位尺度ほど強い関係は示されなかった。これは、「外在要因への期待」と社会・政治的態度の評価（楽観－悲観）がともに自分以外のものに対する判断をする尺度であるためだと考えられる。従来の楽観性に関する研究では、自尊心・抑うつのような自己に強く関連した要因と楽観性との関連について検討しているが、このように自己以外のものに関連する楽観性に関してはあまり考えられてこなかった。しかし、「外在要因への期待」もMOAIの他の下位尺度やLOT-Rと中程度の相関を示しており、楽観性の一側面を構成していると考えられる。さらに、「割り切りやすさ」は充実感・自尊心との相関がやや低くなっている。「割り切りやすさ」は、CM・抑うつとの間に負の相関を示しており、そのようなネガティブな状態に陥らないような、ポジティブな効果もあると考えられるが、1つのことに執着しないことが、充実感を感じたり、自尊心を高めたりする経験を少なくしている可能性も示唆される。

最後に、本研究の問題点を述べる。本研究で外在基準として用いた尺度は、従来の楽観性に関する研究で取り上げられてきたものが中心であった。しかし、MOAIは従来の楽観性尺度よりも多面的な楽観性を測定する目的で作成された。そのため、今回用いた外在基準が十分であったとは言えない。本研究で示唆された因子の特徴

を考慮して、より適切な外在基準を用いた検討を行い、より良い尺度を構築していく必要がある。

引用文献

- Beck, A. T., Ward, C. H., Mendelson, M., Mock, J. E. & Erbaugh, J. K. 1961 An inventory for measuring depression. *Archives of General Psychology*, 4, 561-571.
- Dember, W. M., Martin, S. H., Hummer, M. K., Howe, S. R., & Melton, R. S. 1989 The measurement of optimism and pessimism. *Current Psychology: Research & Reviews*, 8, 102-119.
- Frost, R. O., Marten, P. A., Lahart, C., & Rosenblate, R. 1990 The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 449-468.
- 林 潔 1988 学生の抑うつ傾向の検討 カウンセリング研究, 20, 162-169.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育（二） 児童心理, 24, 1445-1477.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の作成－生涯発達の利用の可能性を探る 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 西平直喜 1979 青年期における発達の特徴と教育 大田堯他（編）子どもの発達と教育6 岩波書店 Pp.1-56.
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究－現代青年の心情モデルについての検討－ 教育心理学研究, 32, 12-21.
- 大野 久 1990 青年期の充実感と学生生活との関係 日本教育心理学会大会発表論文集, 32, 233.
- 大谷佳子・桜井茂男 1995 大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 66, 41-47.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 桜井茂男 大谷佳子 1997 “自己に求める完全主義”と抑うつ及び絶望感との関係 心理学研究, 68, 179-186.
- 沢宮容子・田上不二夫 1997 楽観的帰属様式尺度の作成 教育心理学研究, 45, 355-362.
- Scheier, M. F. & Carver, C. S. 1985 Optimism, coping, and health: Assessment and implications of generalized outcome expectancies.

- Health Psychology*, 4, 219-247.
- Scheier, M. F., Carver, C. S., & Bridges, M. W. 1994 Distinguishing optimism from neuroticism (and trait anxiety, self-mastery, and self-esteem): A reevaluation of the Life Orientation Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 1063-1078.
- Seligman, M. E. P., Abramson, L. Y., Semmel, A., & von Baeyer, C. 1979 Depressive attributional style. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 242-247.
- Seligman, M. E. P., & Maier, S. F. 1967 Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*, 74, 1-9.
- 辻岡美延・東正訓 1986 社会・政治的態度の基本的三次元モデル—疎外・アノミー・適応の因子分析的研究— 関西大学社会学部紀要, 18, 31-64.
- 辻岡美延・東正訓 1989 社会・政治的態度の基本的三次元モデルⅢ—延長因子分析による評価・外的統制—内的統制・適応の基本的三次元空間における保守—革新諸態度変数の位置づけとその解釈— 関西大学社会学部紀要, 21, 23-69.
- Weinstein, N. D. 1980 Unrealistic optimism about future life events. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 806-820.

(2000年9月16日 受稿)

ABSTRACT

Construction of Multidimensional Optimism Assessment Inventory.

Fumitaka ANDO, Yoshifumi NAKANISHI, Hideshi KODAIRA, Mari ESAKI,
Ichiro HARADA, Kanako KAWAI, Kazumi OGAWA, and Hideyuki SAKIHAMA

The purpose of this study is to construct the Multidimensional Optimism Assessment Inventory (MOAI) and to examine its reliability and validity. Prior to the investigation, three subconcepts of optimism (optimistic expectancy, optimistic evaluation, and easy switching) were hypothesized and 46 items (optimistic expectancy; 24 items, optimistic evaluation; 16 items and easy switching; 6 items) were selected. Four hundred and sixty undergraduates were administered MOAI and other scales. Exploratory factor analysis yielded 6 factors, so 6 subscales were constructed (optimistic evaluation for ability, easy switching, optimistic expectancy for external resources, optimistic expectancy for luck, groundless optimism and optimistic expectancy for future). Except for groundless optimism subscale ($\alpha = .56$), Cronbach's alpha coefficients of five subscales were moderately high (they were greater than .65). The correlations between the score of MOAI and other scales supported hypothesized relations. Taken together, the result confirmed the reliability and validity of MOAI, at least partially.

Key words : optimism, construction of a scale, reliability, validity